



Vol.28

ゆうことみゆきのふくふくトーク ソノコ de ソノコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた
本田優子(札幌大学副学長)と
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、
その魅力をソノコ(=お便り)形式で
語り合います。

イラスト/安田千夏

ユカラ(英雄叙事詩)



アイヌの物語全部をユカラと呼ぶと勘違いをしている人って結構いるよね。アイヌの物語は、語り方や登場人物などによって幾つかのジャンルに分かれていてユカラもその中のひとつ。叙事詩や英雄叙事詩と訳される話で、地域によってはサコロバやハウキとも呼ばれるの。アイヌの物語の中でも娯楽性があるって、長い話が多く、語るのに数時間かかるものから、三日三晩語っても終わらないものもあったとか？

レプ(二拍子木)で拍子をとって、節をつけて語るように語られるの。自分の節で語るのでも、同じ話でも語り手によって節回しが違うのも当たり前。聴き手もレプ二で拍子をとったり、話の合間に「ヘッーホッー」とヘツエ(囃)

子詞)を入れたりして盛り上げるんだよね。ユカラの多くは、空を駆け、地を潜りと、超人的な能力をもった少年が大暴れして活躍する話が多く、戦いや恋愛などの体験談がいっぱい。同じ話でも語り手によっては得意なシーンが長くなったり、嫌いなシーンは端折ったりとさまざまに語られるのも特徴で、血を流し、肉を切り、骨を砕き、斬られても斬られても戦い続けるというようなシーンが事細かく語られることも。

優子さん、戦うシーンといえばアイヌ文化振興・研究推進機構が制作したユカラのアニメ版、観ました？十分程度と短いけど、戦闘シーンの迫力ある刀さばきや、超人的な身のこなしも必見。アイヌ語のセリフ回しも、ユカラを聴くのととは違う感覚で新鮮だよ。



観ましたよー！
アイヌの物語って、

伝統的には文字に頼らず口伝えが基本。語りのパワーと面白さが大切にされてきたんだけど、現在は文字で表した文学として触れる機会が多いよね。でも、やっぱりそれじゃ伝わらないところがいっぱいあるから、その点、アニメってとてもいい！



英雄叙事詩の主人公
ポイヤウンベ
(イメージ)

とところで、かつては人が亡くなった時、死者の枕元でユカラを語ってあげたんですって。その時は、必ず最後まで語り終える約束。だって、おもしろいところでやめたりしたら、「続きはどうなった？」って出てきちゃうからって。つまり、お化けが出るほど面白いお話…それがユカラってことだよ。

ある意味、「スーパーマン」が主人公のユカラは、特にアニメ向き。登場人物も美少年・美少女だしね(笑)。でも、アニメ化されたのはまだほんの教話。当面は、書かれたもので楽しむしかないかな。

日本語に翻訳されているユカラで代表的なのは、金成マツさんというアイヌのおばあさんが書き残し、北海道教育委員会が毎年刊行してきた、俗称「ユカラシリーズ」ですね。販売されてるわけじゃないので、興味のある方は図書館でどうぞ。

金成マツさんは、『アイヌ神謡集』で有名な知里幸恵さんや、その弟で北海道大学の教授だった知里真志保博士の伯母さんにあたります。姪の幸恵さんが亡くなってから、五十二歳でユカラを筆録し始め、アイヌ文学研究者の金田二郎助先生や甥の真志保博士に残したの。流麗なローマ字でびっしり書き込まれた約二万ページ分の大学ノートは、まさに人類の宝。

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学副学長。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族博物館専務理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■安田千夏(やすだちか):神戸市生まれ。元アイヌ民族博物館学芸員。現在は同館でアイヌ若手育成事業の自然講座講師を務める。